

研究主題

平成24・25年度 練馬区教育委員会教育課題研究指定校

どの子ども自信をもって書くことができる指導法の工夫

— モデル文や文集「練馬の子ら」を活用して —



あいさつ

練馬区教育委員会教育長 河口 浩

国語科では、実生活で生きてはたらし、各教科等の学習の基本となる国語の能力を身に付けることが重点の一つに置かれています。

練馬区立谷原小学校では、「どの子ども自信をもって書くことができる指導法の工夫」を研究主題に掲げ、様々な文の種類に応じた書き方について丁寧に指導を積み重ねてきました。教師が書き方のモデルとなる文を作成し、文章の構成や使いたい表現を含めた「書くこと」における指導事項を明確にし「学習過程の明確化」を図った指導計画の作成につなげられてきました。

本校の研究成果を各校で参考にされ、各教科等における「書くこと」の指導や言語活動が一層充実されていくことを期待しております。

はじめに

谷原小学校長 眞瀬敦子

今までの書くことの指導は「書く内容」中心で、どのように書くかという「書く方法」の指導が薄かったという反省から、スキル学習を取り入れました。

私たちは四苦八苦しながらモデル文を作る事で、初めて指導事項を明確にもつことができるようになりました。このことは評価とも直結します。

様々な書くことの指導法がありますが、本校の研究は単元学習の前段階としてこのような指導が必要なのではないかと提案です。どうぞ忌憚のないご意見をお寄せください。

2年間丁寧に指導くださった元国立音楽大学教授田中延男先生と、このような機会を与えてくださった練馬区教育委員会に、心より御礼申し上げます。

練馬区立 谷原小学校

平成25年11月1日

研究の概要

● 研究主題設定の理由

国語科における指導の重要性

「国語の学習が、すべての教科・領域の基礎となる」

- 校内研究で、平成20年度より「話すこと・聞くこと」「読むこと」「平成24年度より「書くこと」に取り組む。

- 従来の「書くこと」の指導は、取材等、表現する内容を重視していて、「どのように書くか」という表現方法の指導が十分に開発されていない。
- 「児童がどのような文章を書くことができよいか」という明確な指導内容や観点を教師がもっていない。

どの子も書ける作文指導の必要性

「作文の苦手な子、好きでない子も、作文が得意な子と同じように、**自分の力**で書き上げられるようにしたい」

「様々な文種に応じた書き方」の指導に重点を置く

● 研究の内容と方法



研究の構想 (H25年度)

学校教育目標

- ・よく考える子
- ・思いやりのある子
- ・たくましい子

昨年度の研究成果と今年度の課題

書くことを通して思考力を向上させるために、研究主題を「考えて書き、書いて考える児童の育成」として研究をスタートさせたが、児童が文章を書けるようになるためには、まず「どのように書くか」ということを指導する必要があることが分かった。そこで、講師の田中延男先生の「国語科の学習では、表現したい内容ではなく、表現する方法を具体的に理解させ、身に付けさせていくことが重要である。」という考えに基づき、どの子にも確実に「書く力」を身に付けさせることを課題とした。モデル文の作り方の共通理解が図れたこと、指導と評価の一体化が図れたこと、児童の書くことへの意欲・書く力が向上したことが成果としてあげられる。今年度は更に、どの子も書ける手だてとしてモデル文の作成に力を入れ、自信をもって書くことができる児童を育成する。

研究主題

「どの子も 自信をもって書くことができる指導法の工夫」 モデル文や 文集「練馬の子ら」を活用して

低学年

指導の手だて

- モデル文を使って、「使いたい表現」を具体的に示す。
- カードを掲示して交流の場を作る。
- 「～からです」を使って、理由を表す語形を学習させる。
- 絵や図を使って、意欲が増すようなワークシートの工夫をする。
- 視点をはっきりさせ、じっくり観察させる。

必要な力

学習指導要領より

- ① 文と文の続け方を考えて、意味が正しくつながるように書く力
- ② 自分の考えが分かるように、簡単な組み立てを考える力
- ③ 身近な相手に分かるように文章を書く力
- ④ 自分が書いた文を声に出して読み、文字の誤りなどを直す力
- ⑤ 取材を通して、書きたい題材に必要な事柄を集める力

めざす児童像

- 事柄の順序に沿って書くことのできる子
- 自分の思いや考えを進んで書こうとする子
- 書いたものを読み合い、よいところを見つけて感想を伝え合うことができる子

中学年

- モデル文を使って、文の構成が色で分かるように示す。
- 「使いたい表現」を具体的に掲示する。
- 相手意識・興味関心をもたせる言語活動を設定する。
- 組み立てメモを効果的に使用させる。

- ① 段落相互の関係などに注意して、文章を構成する力
- ② 書こうとすることの中心を明確にし、理由や事例をあげて書く力
- ③ 文章の間違いを正したり、よりよい表現に書き直したりする力
- ④ 文章を書くために必要な事柄を調べる力
- ⑤ 書いたものを発表し合い、意見や感想を述べ合う力

- 相手や目的に応じて、書こうとすることの中心を明確にし、段落相互の関係に注意して書くことのできる子
- 自分の思いや考えを書くための材料を意欲的に収集・選択し、進んで書こうとする子
- 書いたことを発表し合い、友達のを受け止めて更に考えることのできる子

高学年

- モデル文を使って、文の構成や文末表現の工夫を具体的に示す。
- 段落ごとの役割や、「使いたい表現」を選んで書けるような「虎の巻」を作成する。
- 読解の学習の中で考えたことを根拠としたり、読書の中で見つけた表現を使わせたりする。

- ① 考えを表すのに効果的な文章の構成を考える力
- ② 必要に応じて文章表現を工夫したり、図や資料を用いたりする力
- ③ 自分の書いた文章を読み直して、よりよい表現にする力
- ④ 目的や意図に応じて書く事柄を集め、見直しをもって整理する力
- ⑤ 書いたものを交流し合い、よい表現や構成に気付いて学ぶ力

- 目的や意図に応じて、文章全体の構成の効果を考え、自分の考えが伝わるように書くことのできる子
- 日常生活や他教科の中でも、文種ごとの書き方が分かり、積極的に書こうとする子
- 書いたことを発表し合い、友達からの助言を受けて、表現の効果などについて更に工夫したり推敲したりできる子

実践事例 (3年・読書紹介文)

指導計画 (4時間扱い)

次	時間	学習活動
1次	第1時	<p>(1)学習課題を知り、めあてをもつ。 選んだ本を紹介しよう。</p> <p>(2)図書室の工夫を見付ける ●本を早く見付けるための工夫 ●何を読もうか迷っている人のための工夫 ●本を借りる人のための工夫</p> <p>(3)友達に紹介したい、物語の本を1冊選ぶ。</p>
2次	第2時	<p>(1)「スイミー」を紹介したモデル文を読み、読書紹介文の組み立てや言い回しを調べる。 読書紹介文の書き方を調べよう。 ステップ1</p> <p>●モデル文の3段落構成をとらえる。 ①あらすじ(人物、事件の始まり) ②読んでほしいところ(場面、感想) ③おさそい(誘い)</p> <p>●読書紹介文における特徴的な言い回しを、各段落から見付け、短冊にして提示する。 <使いたい表現の例> あらすじ 「ある日、 「さて、～でしょうか。」 読んでほしいところ 「いちばん～なのは、～の場面です。」 おさそい 「どうして(どうやって)～かは、読んでみてのお楽しみ。」</p> <p>(2)共通教材「おじさんのかさ」を読む。 モデル文で学習したことをもとに、「おじさんのかさ」の読書紹介文を書こう。 ステップ2</p> <p>(3)共通教材「おじさんのかさ」のあらすじをつかみ、各自が読んでほしいところを決める。</p>
	(本時) 第3時	<p>(1)共通教材「おじさんのかさ」について、モデル文から学んだことを活用して読書紹介文を書く。 (2)紹介文を発表し合い、よいところを共有する。</p>
3次	第4時	<p>(1)図書室で選んだ本の、読書紹介文を書く。 自分で選んだ本の読書紹介文を書こう。 ステップ3</p>

指導上のポイント ①

導入では、だれにどのようなことを伝えるのか、相手意識と目的意識をもたせる。

指導上のポイント ②

モデル文を通して、文章構成と文末表現などの言い回しを指導する。

指導上のポイント ③

モデル文・共通教材で学んだことをもとに、自分の伝えたいことを文章で表現できるようにする。



本時の展開

時間	学習活動	☆手だて ○留意点 ◆評価
導入	1.読書紹介文の文章構成・特徴的な言い回しについて確認する。	☆前時に使ったモデル文を参照する。
展開	2.本時のめあてを知る。 モデル文で学習したことをもとに、「おじさんのかさ」の読書紹介文を書こう。	
	3.モデル文の組み立てと言い回しを使って、読書紹介文を書く。 ●モデル文の言い回しを使って、あらすじを書く。 ●人物の紹介 ●できごと(じけん)の始まり ●問いかけの文 ●モデル文の言い回しを使って、おすすめしたいところを書く。 ●特に読んでほしい場面を決め、一文で書く。 ●読んでほしい理由を一文で書く。文を引用してもよい。自分の感じたことを伝える言葉で終わる。 ●モデル文の言い回しを使って、おさそいの文を書く。 ●その本を読んでみたくなるような言葉を書く。 4.書いた紹介文を発表する。	☆前時に取り上げた「使いたい表現」を短冊にして提示する。 ○どうしても進まない児童には、教師が板書で例文を示し、視写させる。 ○読んでほしい理由には、自分の気持ちを表す言葉を使わせる。また、同じ言葉の反復は避けるようにさせる。 ◆モデル文を参考にして、紹介文を書くことができる。 ○児童の書いた紹介文のよいところを共有させる。
終末	5.紹介文を読み合せて気付いたことや感じたことを発表する。	◆友達の記事のよいところを探そうとしている。

児童の作品



基本の考え方

（ 三つのステップを踏むことで、児童は文種毎の書き方を身に付け自由に書くことができるようになる。）

1年 紹介文

「好きなもの、なかに」

ステップ1

モデル文の提示

学年

文種

必要な要素は？

教師によるモデル文の作成

- ◎指導事項がはっきりする
 - 文の構成
 - 使いたい表現

か	で	ぎ	て	ら	は			し	き			き	で		
っ	ん	ゅ	っ	で	や	ぼ		い	で	わ		も	す	わ	
こ	し	う	べ	す	く	く		も	す	た		ち	た		
い	や	し	ん		は	は		の	が	し		が	て	し	
い		よ		し				の	が	た	は	い	っ	は	
		く		っ	で	す		で	べ	み		い	べ		
				て	ん	ぎ		て	た	き	や	か	ん	の	お
				か	や	た		く	こ	う	き	ら	ま	ぼ	お
				っ	が	よ		る	と	う	た	で	て	り	の
				こ	い	き	へ	か	の	し	よ	す	の	ぼ	
				い	い	で	い	ら	な	い	く		ぼ	う	い
				い	か	す		す	い	お	が	と	る	が	す
								い		こ		と	き	す	み

促音や拗音が入ったモデル文を作成する。

各学年の実践

ステップ2

共通教材で学ぶ

モデル文を参考に

みんなが共通の題材で書く

- ◎書き方の習得
 - 使いたい表現
 - 文の構成
- ◎「どの子にも書ける」ことを目指す。

ぶ				す			
る	わ			っ	ぼ		
ぶ	た			は	く		
る	し			は	く	は	
し	は			て			
て				お	か		
お	ぶ			い	ぼ		
い	ど			し	す		
し	う			い	か		
い	か			か	ま		
か	す			ら	き		
か	す			で	で		
か	す			で	で		
か	す			す	す		

食べ物に限定し、好きなものの紹介文を2文で書く。「～からです。」

ステップ3

個別教材への発展

共通教材で習得したこと

各自で取材

「基本」の書き方を使って書く

- 独自の発想で発展させて書く
- 他教科や日常につなげて書く

い	だ	わ		○じぶんの	す	き	な	の	と	そ	の	わ	け	を	か	こ	う
て	ん	わ		す	き	な	の	と	そ	の	わ	け	を	か	こ	う	
さ	ず	た		す	き	な	の	と	そ	の	わ	け	を	か	こ	う	
が	が	も		す	き	な	の	と	そ	の	わ	け	を	か	こ	う	
ぼ	お	は		す	き	な	の	と	そ	の	わ	け	を	か	こ	う	
り	わ	は		す	き	な	の	と	そ	の	わ	け	を	か	こ	う	
す	っ	だ		す	き	な	の	と	そ	の	わ	け	を	か	こ	う	
る	た	ん		す	き	な	の	と	そ	の	わ	け	を	か	こ	う	
が	あ	ま		す	き	な	の	と	そ	の	わ	け	を	か	こ	う	
ら	と	が		す	き	な	の	と	そ	の	わ	け	を	か	こ	う	
ど	あ	ま		す	き	な	の	と	そ	の	わ	け	を	か	こ	う	
を	せ	き		す	き	な	の	と	そ	の	わ	け	を	か	こ	う	
を		で		す	き	な	の	と	そ	の	わ	け	を	か	こ	う	
		か		す	き	な	の	と	そ	の	わ	け	を	か	こ	う	

好きなもの(食べ物以外)の紹介文を、2文で書く。

2年 観察・記録文 「観察名人になろう」



観察文を書くときの「視点」(ニワトリの大きさ・色・特徴・触ってみると)になることを色別にしてモデル文を作成する。

3年 紹介文 「読んだ本を紹介しよう」



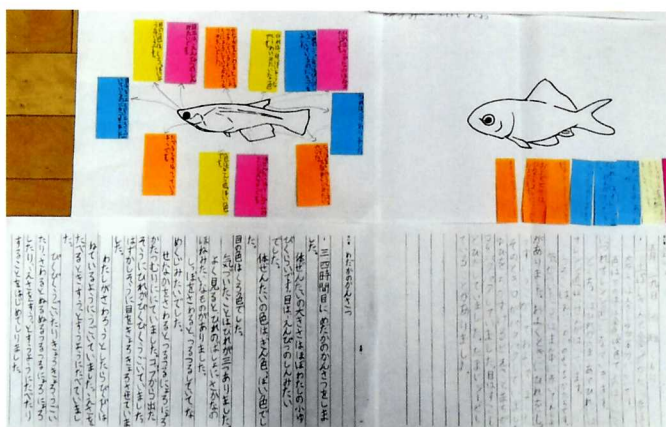
読書紹介文で使う言い回しを使って、はじめ・中・おわりの3段落構成になるよう、モデル文を作成する。



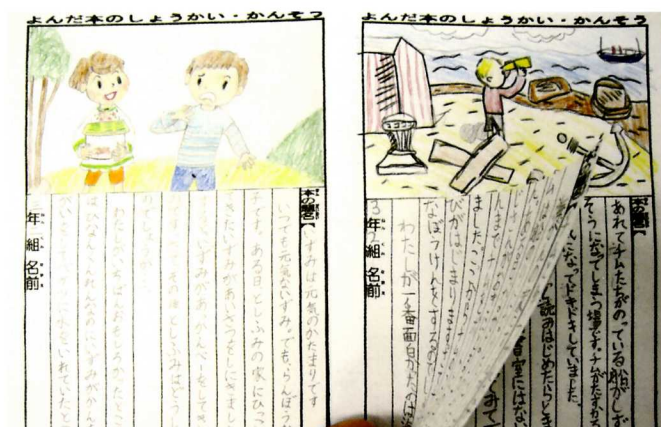
「視点」ごとに色別の付箋を使って、モデル文を活用しながらザリガニについての観察文を書く。



「使いたい表現」について短冊で学びながら、共通教材を書く。



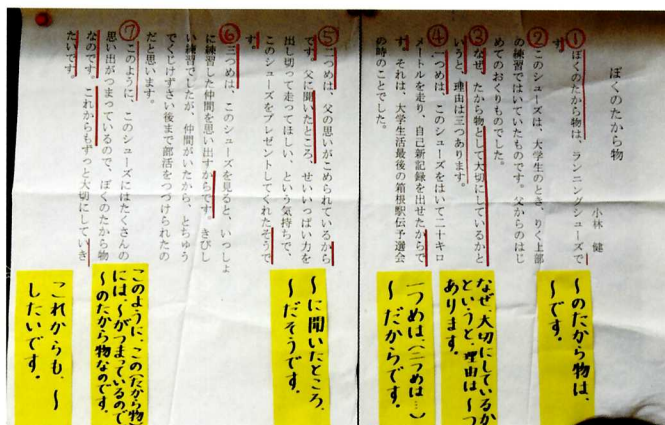
学校で飼っている他の生き物を、共通教材の学習を基に個別に書く。



各自が第1時で選んだ「友達に紹介したい本」を紹介する文を書き、カードに仕上げる。

4年 紹介文

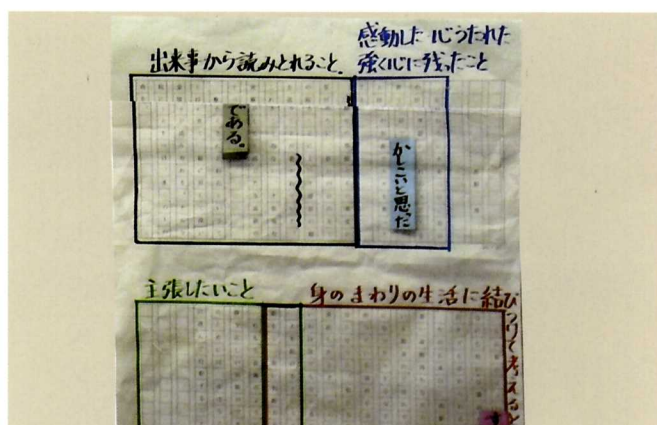
「たから物をしょうかいしよう」



児童が教師にインタビューし、宝物にまつわる思い出や思い、大切にしている理由が明確になるよう、教師がモデル文を作成する。

5年 意見文

「先人の生き方に学び、自分の考えを深め、表現しよう」



伝記を読んで得た感動の中心を、自分の生活と比べながら明確にできるようにモデル文を作成する。



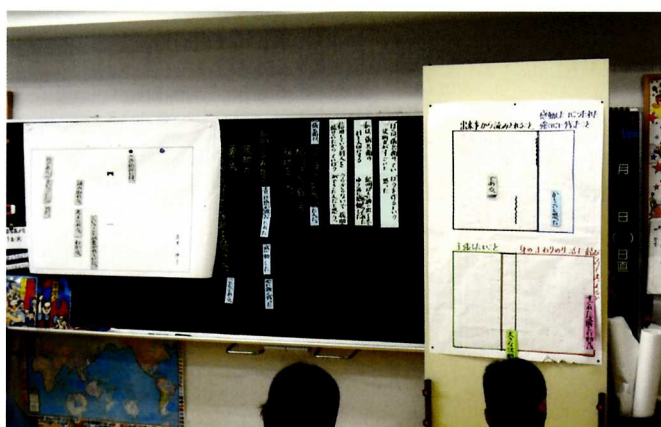
みんなの共通の宝物「新校舎」について意見を出し合い、一緒に構成メモを作成し、メモを基に作文を書く。



モデル文を参考にして『儀兵衛の生き方』についての意見文を同じ構成で書く。



自分の宝物について構成メモを作成し、メモを基に作文を書く。



伝記を読み、自分が選んだ「尊敬する先人」の生き方について、共通教材で学習したことを基にして書く。

6年算数「分数のわり算」

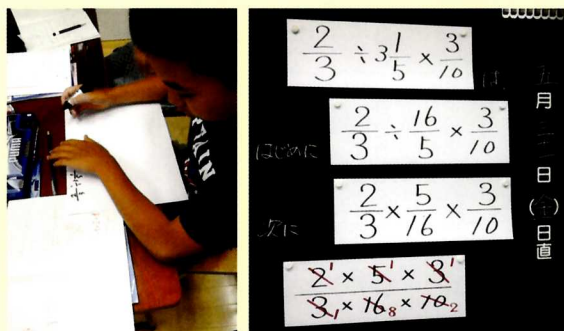
(説明文の書き方を使って)

- ①前単元「分数のかけ算」では、必要なキーワードを提示し、教師と児童で協力して文章にまとめた。本時ではそれをモデル文とした。

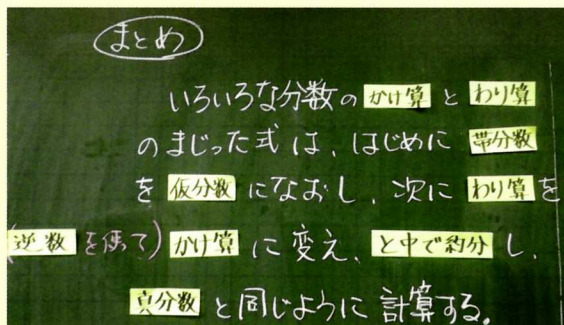
モデル文

整数、帯分数のかけ算は、**仮分数**になおして、**と中で約分**すると**真分数**のかけ算と同じように計算できる。

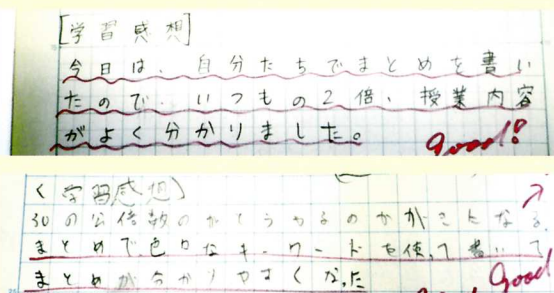
- ②児童の発表をもとに本時の学習内容を深め、文章化の前段階として、式の変形を短冊で提示する。



- ③モデル文をもとに、必要なキーワードを児童自身が挙げ、それらを使って1時間の学習内容を児童自身が文章にまとめた。



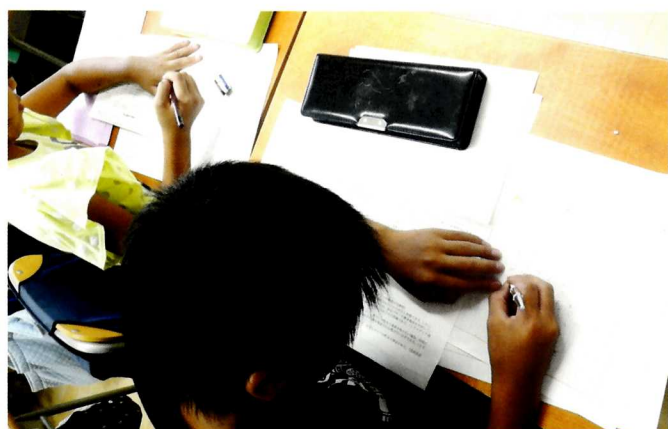
- ④まとめを自分の力で文章にすることで、算数の内容をしっかりと身に付けたことが確認できた。



6年 意見文 「自分の経験や引用を用いて、説得力のある意見文を書こう」



討論会の経験を生かし、「ペットは必要か」という、児童の身近で、かつ二つの立場から考えられるモデル文を作成する。



モデル文や経験引用資料を用いて、共通教材「小学生に携帯電話は必要か」について話し合い、同じ構成に自分の意見を入れて書く。



平和についての資料を集め、共通教材で学んだ書き方を基に、個別で「平和のとりでを築く」に対する意見文を書く。

成果

①児童の書くことへの意欲・関心の向上

昨年度末の意識調査の結果によると、全校で「書くことが好きではない」児童が年度当初より8%も減り、「書くことが好き・まあ好き」との回答が増えている。書くことが苦手だったり好きではなかったりした多くの児童が、「書けてうれしい」と感じ、書くことが少しでも好きになったことは、研究の最も大きな成果である。

②児童の書く力の向上

5、6年生の全国や東京都での学力調査では、「書く能力」についての正答率がすべて区や都の平均を上回った。文と文のつながりや接続語の意味を考える力、資料を読み、分かったことを的確に書く力が向上していることを、研究の成果として受け止めている。

③教員の指導力の向上

モデル文作成と共通教材指導を通して、私たち指導者が、「何をどのようにどの程度書ければよいか」「そのためには、どんな手だてが必要か」という、指導要項と手だてを具体的にもつことができるようになった。教師が子供の立場に立って実際に書いてみることは、他の教科指導でも重要なことである。

④指導と評価の一体化

今まで、「うまい文」という、内容に片寄りがちだった評価の規準も明確になり、このことは、指導と評価の一体化にもつながった。

課題

①「書く内容」をもたせる指導の充実

上記の意識調査によると、まだ1～2割の児童が書くことに対して苦手意識をもっている。書き方は分かっても「書くことが見つからない。」「文をふくらませることが苦手。」などと感じているようである。「書く内容をもたせる指導」については、国語科の中の別の時間、または他教科で、意図的に経験や体験を積みませ、対象を見取る目や取材の仕方を地道に身に付けさせていくことが欠かせない。書く内容を豊かにもち、その表現方法をしっかり身につけたとき、全ての児童が書くことに自信をもつことができるようになるであろう。

②「推敲」の方法や過程

文章を書く中で、語と語、文と文、段落と段落のつながりがしっかりできているか、考えさせることが大事である。児童は書き上げてしまったものを書き直すことに抵抗を感じるので、推敲の方法や過程についても、どのように進めていけば効果的なのかを、今後研究していく必要がある。

平成25年度研究に携わった職員

校長 眞瀬 敦子

副校長 大野 正人

低学年分科会

1-1 大野 葉子
○1-2 杉田 いずみ
1-3 宮北 陽子
2-1 須佐 陽子
2-2 小林 健
○2-3 奥 律枝
☆理科 高瀬 幸恵
養護 押方 富子

中学年分科会

3-1 小岩 玲子
○☆3-2 石川 哲也
◎4-1 村上 美予子
4-2 池田 航
☆4-3 表 良子
音楽 後藤 実穂
図工 吾妻 彰
事務 金子 とめ子
栄養士 藤原 絵美

高学年分科会

○☆5-1 高見 博子
5-2 清水 加奈
5-3 野島 泰一
○6-1 渡壁 正行
6-2 大倉 加奈子
6-3 関谷 宣明
○少人数算数 佐久間 亮司

昨年度研究に携わった職員

大森 文隆

鈴木 素子

福島 美香

松葉 教晃

◎ 研究推進委員長
○ 研究推進委員
☆ 分科会チーフ